類聚名物考

廿三

和書門 類
二七七九八 號
一一二 函
一 架
一六一 冊

内閣文庫
和書 類
二七七九八 號
一〇六 冊
二〇九 函
架

内閣文庫
番號	和 27798
冊數	156 (36)
函號	209 106

国立公文書館 National Archives of Japan

地理部六

同七

同八

類聚名物考

卅三巻

内閣文庫

明治十三年騰寫

道　みち　路

○事物紀原　唐正観十三年天下州府三百五十八始分為十道

日本政府図書

○前漢書　九十三　佞幸傳　鄧通傳　賜通蜀嚴道銅山得自鑄錢

○注師古曰嚴道屬蜀郡縣有蠻夷曰道

長道　なかち

○文撰　雑詩　廻車駕言邁悠々渉長道

○玉ほこの道　二三の説あり　一には壽の姑星の玉をかざりたる鉾の説袖中抄
二には静室の説　三には神代に総太刀の柄ぬきやあすさう
桙を携へてなろ人としるやといふ説之

○叢林歌話云　衆説には玉は初めていふ詞なり何事につけても
云ぶこは歩行之詞を歩りの道といふ縁となり

○二説歌語の説あるといふともなぬ事なれはとる事たとしへもかくいふとも知りておくへし　枕云燭明抄　駿河の万葉の枕ことば
考冠辭考などを見て志るへし

道遠　こちまどひ

行つきなきハあるてはわぬることはふと云之　六法抄初句物
得まなきにいまえつるれてなたりし　ことなるへきと見えたり

○良玉集
冬来てハおひなりけし荒気山雪をれしつなさとひなり　俊頼

道しるへ　嚮道

道のしるへともいへり　学道を訓里依て云　案内者之

○拾玉集四　法楽日吉百首

まよひては神も仏の道しるへ　ゆくをたすけはなにかよふ

○夫木抄

君のこえふ坂に向る旅を山暮しきいてふ道しるへせよ　為家

○未穂集

ゆかひの道のしるへにはくれすはへてそけるか足柄の関

たのめ人
○拾玉集七　山路秋行
月影のもれくる嶺の庵の主ハ見すれたのめ人ならはや

道さまたけ
○夫木抄第一　若菜　大納言師補
摘人のみちさまたけにつもる雪ハ生田の小野の日をまちにけり
○堀河院太郎百首

道のそら
そらハ中途之半天をいふそらの例に同し定まて半途（途）
とりたかしこのそらといふ詞ハまふの詞之云語也
そら二言の詞なれは
○赤染衛門集一　おもひつゝしきありておはしませは　此比人の許
遣はすか
玉かつらたえぬ心そ猶よせハうきことのみそ誰ハつれなし
○小大君集
ふきすきるを見てわりなしおそらく君猶ハ　おそらく道のそらにてひなん

道中　みちなか　又　みちのなか

○前漢書八十六 王嘉傳 賢母病長安厨給祠具道中過者皆飲食 ○注如淳曰禱於道中故行人皆得飲食

○家持名寄

君をとふみちのなかなるはこえて 懐中抄 地冥の小山のなかつまー 一八

道鍋

こちぶり

なかぶりとも いふなるを行に鍋さする乃意之又ぶりハ表出哉

ひなぶりをもいふ之可教の手振をいふハ乃様の名なるべし

吐佐日記まちぶりの非なることのうたを通ふへし

○東際歌集三 同人 雲の様を見となく消ぬるいとめて

こちぶりのたまかりハ待たせんとけて 見えし雲のたなき

坰手　くまで

道の隈ゟも　又ちハ阿ちハかハ也りよこまれ多えとして隈隠(タ)

のとも　のなれハいふてハ道といふ同じ縄手なとも同じ語之手ハ

借字そ正訓ニハ非ず　詩魯頌ニ在坰之野とも見ゆ

○古事記上大國主神云、僕者於百不足(モヽタラズ)八十(ヤソ)坰手隱而侍

みちのおくか

おくハ奥処之隩を訓せ字書ニ隩蔵也と注されハ何らハ末
らむ（の）あしまて深かきをいふ之任りぬのおくふかき之意の
古言なるへしと知へし

○文選 蕪城賦 鮑明遠 李善注 拖以漕渠軸以崑岡重江複関之隩 於六切 四會
五達之荘 ○注蒼頡篇曰隩蔵也

なわて

○和名抄 田園部 畷 四声字苑云田間道昌雪反漢語抄云
奈八天 畷

田間の道ハ細くなかくすぐなれハ縄のたぐひなるらし
ぬくまゆうをまつれハ縄のまのぬくなる紐ニいふめるをとハ
雲のまよひてといふかぬくもくまあぬくなれハいふ之阡陌
の字ニ作り江戸ニ者輪といふ所なる是ハ方言なれとも又
字阡と書へし古事記ニ百不足八十垌手と見えしも
手ハ借字ニて道のことなり

三經 高丹於稍云

三又路口　おいわけ　追分　三叉口　みつまた

今道の岐股にわかるゝ所を俗に追分といふ是ぞ三又口

なりさて箏の股の形に似たれはいふ也その筆者によりて物語

するに股にもまた見えさきに紀行なとせし時にぞありし其程のめく

こゝろよりと申しするなりき箏のめくともいふ　五色石 第二よ

三又路口と見えたりハ三股の追分之

○姓源珠璣石敢当条下或贈以詩曰甲冑当年一武臣鎮安天

下護居民捍衛道路三又口埋没泥塗百戦身銅柱承陪間

紫塞玉關守禦老紅塵英雄来往休相問見盡英雄来往人

道狭　みちとせ

路せまくの意也 宿とせ 庭とせ 路とせ 山とせ こゝろ同し
こゝ之せまき坂せとのこゝふハ略語也

○六百番歌合 春 志賀山越 十番右　信定

路せに花の白雲路とちて ゆきかへる志賀の山こえ

道をさす

○万物故事要決六 其界なんとの道をさすと云ハ何事でもさすとハすぐにといふ義指の字を書之上林賦ニ卒呼直指（ヒキヰヨヒテタヾチニ）と云ここにハすぐに行所之道句の注ニ指ハ行也と釈せり道を指と云ハ此心なるべし

道々　みちみち

○赤染衛門集

うきことをゆきのふる人ハ泊瀬川わたしきみちにたちまけれ

取道

取道ハ道の道筋をとりて行ひけるにいへり上道といふもみちの程乃なりけるにいふ之取ハ云捨ふの意よりて転じていふ之

○史記八十六刺客傳 荊軻 遂發太子及賓客知其事者皆白衣冠以送之至易水之上既祖取道

上道　みちをのぼる

陰踏道　かけふむみち

○夫木抄七　文應元年七社百首　民部卿為家

神まつるぬさゆきこそまたくゝち花の陰踏道そ花やちらさん

細石　さゝれいし

まとゐして神まつる家そかゝりける萩の下しけき細道の細石（一本忍道イ）　西行

○徒然草第四十四段　あやしの竹の編戸のうちよりいと若き男の月影に色あひさたかならねとつやゝかなる狩衣にこきさしぬきいとゆゑつきたるさまにてさゝやかなる童一人を具してはるかなる田の中の細道を稲葉の露にそほちつゝ分けゆくほと笛をえならすふきすさひたる

○同百六段　高野の証空上人京へのほりけるに細道にて馬にのりたる女の行あひたりけり

○夫木抄五　[illegible]　順徳院御製

小山田のあせの細道行人もまれとなりて玉苗のかりなる

同八　夏雑　為家百首寄居　後鳥羽院宮内卿

見渡せは流もゆるかぬ夏草に松かけたかき棧の細道

うましみち
味御路　うましみち

味ハ阿知の言ハうましと訓之味酒を阿知佐計と訓ハことくて
うまきさけと訓へきなり御路ハ火遠理命之事と塩椎翁の教
ていふことの御路とハいへるなりされハ真路のことなれハ未知
○まよひこしまよひ道のことゝ同

古事記上尓鹽椎神云我為汝命作善議即造無間勝間（マナシカツマ）之小船載其船以教曰我押流其船者差暫往将有味御路乃乗其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見神之宮者也

復路

かへりしなをたゝへるそのなをかへるとはいふ之今かふハ伝ふる
ところ町まふハ錯乱のこぶくろ坂などゝゆふの乱ひハこの言語をあやまり縁
のめくなりといふもとよりのことなり之

○後漢書十八臧宮傳還営願従它道矣宮不従復路而帰賊亦不敢近之

迷途　まよひみち

謬路

疑路　いふかしみち

大路　おほち

○拾玉集四　賀茂法楽百首　夜

志らの女も大路が簡ぞ夕志らゝぶかゝひゝ此足はゝひゝく

道の家掛ふ詠人

○新後拾遺集序　藤原良基　ゆるゆき法らつくしことこまかしく花
まゝもかゝもしく深き泉を伝へく源しき行ありも志み
しこちの家をそらふうる人も北く時を讃り林の風に
うそふくかしこきともかゝもそちまち山御むる時に至れり

車を挽ふ　夫木抄巻六

葛下道　　つゝのちかみち

○夫木抄廿一　　法印定家
雲ふかき葛の下路ゆけとえて思ひまかゝるうつの山もと

葛細石
○夫木集　山部　　僧正行意
うつ川の山さくらをはいかて家しかと雲をつくる葛の細石
此哥不審く有

軽道　かるのみち　大和国　高市郡

軽へ行道にて之軽の市路をもいふ其所軽の地なるの
秋津島とも云る由因也之

○万葉集二　長歌
天とふや軽の路ハ吾妹子か里にしあれハ

竹下道　たけのしたみち　相模国

是ハ二ツのみちあり竹の生たる下行道ともいふハ名前
にあらす是竹下ハ相模と駿河の界にて足柄の峯をへて
行たまふ所之今の箱根宮の所裏にあたる者の海なる
其足利氏の合戦あるところ也之昔ハ今の箱根の山を
ハ通りましして足柄の峯をかえて小田原の庭にいたる之より
駿河の府の口へいたる之今もその所なり

○太平記ニ俊基朝臣再関東下向之事　宇治自見　かんなきまして
落花の雪にふみまよふ交野の春の桜かり紅葉の錦をきてかへる
つゝある嵐の松風に浮寝の鳥をとゞむれハ塩ひや浦き寄る
きえておりつ川田子のみつゝも浮世をめくる車返し竹の下道
ゆきなやむ足柄山のたをけより大磯小いそ見おろして袖にも
波こゆるまつの　いそくとしも　なそれとも日数つもれハ七月廿六
の暮鎌倉へそつきたまひけれ

鳥羽作道

ゆえの詮ありき　山崎美成

徒然草上　百卅二　鳥羽の作道ハ鳥羽殿立られて後の名にハあらず昔よ
りの名也　元良親王元日の奏賀の声甚殊勝にして
大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし李部王の記に侍
るとかや

○白河院の應徳三年に鳥羽殿を立られ仙洞の御所とし
李部王ハ延喜帝の皇子にて式部卿重明親王と申せし
これらハ白河院よりハおるに昔十六代を隔て古人
の書に見しところなれハその名ふるきなり

○太平記六　楠天王寺出張之事　宇都宮一人武命を受て大敵に
向ひて命を惜まざりけれハ　宇都宮ハ当日宿へ退て去六
波羅より出て七月十九日午の刻に都を出て天王寺へ立ける
東寺の道ハ馬路としつらなり十四の渡の中にて伺ひける
其の夜の先手も先陣かけける間四塚作道を越ても八百余騎にて於
まけける

野中古道　のなかのふるみち

○新中抄十　遇不逢恋

いにしへのゆかりもいまとたのまれハ野中ふる道こそなかれせん

○藤原元真集

夜半のみちしるへにあひ見もしらぬ野中古道ふみもまよはく

○日本後紀　桓武天皇御補ゆ古宮

古への野中古道はたぬハちかつけなからんや野中古道

野径古路　のへのふるみち

○六百番歌合　冬　野行幸　卅番右　隆信

御幸せし野への古路あれにけり跡傍せぬハ芹河の水

○夫木抄

芹川の野への古路跡ぬとやまのなれ跡もふさす穴

古道　多三ち

古道ハ以乃くてそ云て[illegible]名不[illegible]八[illegible]古之
よう家にも讀ありひ事りし不はり小野古者野中古
道のつらひなり又大和の布留の道氏多三ち以にる
手はり不にきて相まりて似る个し野中の清水とひよ
せたるもの

○拾遺集　物名　多三ち　大和　輔相
多ちはまあやまとたへいかし一つの野中の草ハ露そ含たり
○六帖[illegible]　野[illegible]寺[illegible]書名
[illegible]世[illegible]野人の多ちち[illegible]て[illegible]せぬハ[illegible]川の[illegible]　[illegible]
○[illegible]集
[illegible]の[illegible]て[illegible]ぬの[illegible]野中　多三ち[illegible]
○紀貫之集

石上布留野の花の都にて住人こそやまとにかへるらん
上古天子の都は大和の布留の古都をかはれて都市
の住人の心をよめる也
○袖中抄十　遇不逢恋
いまもの住人こそ居れハ都市古都志とをいたせる

○あまつ三路
○夜京元年撰集歌集にて　前にあるかくよせてなかまて三路と
いふ不至十二等にて
古今のあまのつりにて古き跡の道ハ絶かきあまたみしぬえなり

こなそのミち
うちえ路かや
○夫木抄五　春田　正治二年百首　源師光
このすゑなるこなたの古き都たて見口まつる石かハきたなり

岩のかけみち　　岩陰道

○拾玉集六　嵐吹埋路
なまれてもかよふ人なき山ふかみ嵐そうつむ岩のかけみち

○夫木抄廿一　立春　正治二年百首　源師光
おほえ山いくのゝ峯の残へぬ人もかよはぬ岩のかけみち

○同八　寄西光法師家歌合　夜河　源仲正　○明玉集
こけのむす岩陰道にぬく小河の音ぞ聞えし

○拾玉集一日五百首雑
何くたる岩のかけちの奥の底や世のうきをみぬ住ゐなるらん
同二　勧句百首　吾
吉野山すとや人のあつむらん岩のかけ下さくいはのかけみち

○続後撰集十四　恋　泉通具
若のむす岩かけ道に庭住之下にかなはたよう
　　　　　　　　　　　梅窓使之通

くめのかけち
○夫木抄石原正集　　　　　　大和
　　　　　　　　　　　　　　久米道路
かつらきや久米のつき橋なかなかに渡しかけし久米のかけみち

小野細道　東の北石のこち　陸奥

○宗久旅の記にてこちのくたれ玉前をもたちぬる野を
小野細道といふ所を過てさ浦に末の松山へ出行

石村路　いはれのみち

石村はいはれと訓て懸名同し　雑記は字を用
くだりも　大和志十市郡

○万葉集第三　長歌
つのさはふ岩余の道を朝なれきより通ふ人の上下路

小野古道　あふのみち　近江

小野は山城にも同名あれとも是は近江也

夫木抄廿一　為相
湖と辺の山も見え　うちこえて坂こえくる小野の古道

井手中道　ゐでのなかみち　山城国

井手の中道ハ井手中なる所なり　岩橋も有り

○源氏物語　末摘花巻

おもはずに井手の中道へだつともいはでぞこふる山吹の花

猪名中道　ゐなのなかみち　摂津国 河辺郡

猪名山ハ為那野猪名川猪名ハ猪名山条下ニ出

○夫木抄廿一　家集を見て　能因

ことふ人の為もことすれ忘草おひたりありしゐなのなかみち

同廿九　為経

冬さむミゐなの中みちこえゆけハ稲の葉末も霜わたるなり

野路　のぢ

○名寄云　野路或云野経無名也　不限近江一所云々　但為歌枕
当国名所ニ出云々　所載ニ随テ可用歟

○今案ニ野路ハ野経といふに同じく　いづくの野にてもすべて
野中の道をいふなれバ　近江国野路といふ地名あり
歌にも必しもそこをよめる歌あり　山家集ニ近江路や野
路の篠原とよめるも必しも近江の野路をよめるにハ非ず
たとへバ播磨国ニも上野といふ地名あれど　それを上野とよ
める歌も何処ともなくよめるもあれバ上野とハよめ
るが如し　その歌ハすべてならぬ(きほんの也)

○拾玉集
月の入るをのへの山をめくりてもなよひはまた入野路の志の原
○夫木抄廿一
打はらふ駒の足掻もとまらなく一村雨ふる野路の杉原　為家
○同
秋はきる野路の萩原時こえて露の日数は人もかれなん　同
○名寄　夫木抄を　顕昭
旅人のおりゐる時も見ゆるかな野路の山への雪のむらきえ
○夫木抄
草かくる野路の旅人なまよひて雪のあとふる道のいふ　藤原信隆
○同
雪ふる野路の篠原ときすゝきのはもれ末世之より　宗尊親王
近江の野路といふ所にてよめるとなん

○拾玉集
月の入るをのへの山路目にかけて今秋はまた入野路の志の原
○拾玉集六　霧旅
身はうきは野路も山路もさもあらはあれ山はうちの霧よりそ行
○名寄
尋ねて行袖にも露そかゝりける萩の枝しのき野路の細道　雅有
○同
うちむれて人ゆきかふ野路の夕されは萩ちりて送る白露の秋　雅有
○山家集
近江路や野路の旅人いそかなんやすかはらとてとをからぬかは
○拾遺集
東路の野ちの雪まをわけてきてあはれ都の花をみるかな　藤原長能
○新勅撰
東路の野ちの草葉の露しけみ行もとまるも袖そしほれて

家路　いへぢ

○万葉集

つきゝし家路ふこそけしかすか花浪かくてもまつ乃心

山路　やまぢ

○拾玉集六　寄旅　　兆名不　桜ほ玉

身ハうりハ独ちま山路をたどりハあれ心ハうきよの空にまよへる

○

播磨かたに入りける時三月ハかりまみまよ

のぼり侍りけるまゝ仏の寺やまぢといふ所参る道

すがら塩のとまりて侍るとも見えつつまかりける

岩かきの花も咲ぬらん春もなほ故いそく舟出せ

瀬路　せなぢ

海路といふを同しきたまへ瀬のやなあひといへハ瀬汐の

路をいふなるや

○拾玉集一　日吉百首　雑

夕なぎに拾えたるのにあつむれハ心のまでもなき瀬路の風

海道　うみぢ

○古事記上 尓豊玉毘賣命知其伺見之事以為心恥乃生置其御子而白妾恒通海道欲往来然伺見吾形是甚怍之即塞海坂（路一本）而返入

海路　うみぢ

うみぢともいへり海河に舟の行かよふ路之

○源順集
ゆかよふ海路ハいつれと志らすれ海ハ波にまくそたえぬ（なうえ）

○源重之集
名をたのむ志香の島へと漕れとそいふも海路に着ぬべき

通路　　かよひち

○拾玉集六
花ちりて雲こそなけれ峯の霧ふかきや春の夜のかよひち

市路　いちぢ

○夫木集　盲言

君こゝろ盲にあれハ数書き人何信の市路にたてるむ之

夫木抄云　俊頼

関路　せきみち

いつこまても関所のあるみちの往還の道をいふ也関山あるところも同し意にて名所にあらさる関ちといふもこゝちの跡まて道路かよふなりしといへり

○夫撰集

名のミして跡たえにけりこゝろのあふ坂あらぬなこその関こゝち

讀人しらす

五了

行かひの相坂ならぬせきこゝちハ絶え跡のうひやあるらん

関道　せきち

上にいへるごとく関の路にてもいひて名所にあらず関ぢを略て関ぢとのみもいふ同意也

○後撰集十九離別　あるじ家に久しう侍りける女の美濃へまかりけるとぶらひにまかりけるに　藤原きよ君

今はとて立かへりゆく故郷の不破の関路に都忘るな

鳥路　鳥道

高山中に鳥のゆきかよふ計なる道をいふ一のぬくもの中にはおのづから鳥のゆくみちもなるをいふそれより転て道の無き所にせまきみちなどいひし事の符録を鳥道といふ也周礼の注疏にもしるし見えたり文撰にも見えたり

○文撰謝玄暉詩、馳暉不可接、何況隔兩郷、風雲有鳥路、江漢限無梁、○注李善曰南中八志曰、交趾郡治龍編縣自與古鳥道四百里、○呂延濟曰、風煙之中、有飛鳥来往

あはち　淡路

○恵慶集

よもすがら淡路にかよふはまちどりいつこを宿とさして行らん

濱路　たかまぢ

○夫木抄　正治二年百首　百合　寂蓮法師

塩こえぬたかまの濱路のさゆりまも入ぬる磯は浪の下草

○千五百番歌合　家良

真葛はふたかまの濱路の夕風にうらみてかへる奥つ白浪

花の蔭路　はなのかけち

花の下行道之　万葉に橘のかげふむ路などもみえたり

○拾玉集六

みよしの山にまよふ心のあとなれや花のかけぢに風つたふなり

花の下道

○夫木抄廿　名所歌中　為実

ともなひし春の跡ゆきもつもれるは小倉の山の花の下た

舊野中道　ふるのなかみち

ふるのなかみちハいつくまてもいひつく名所にあらず　ふりたる野の中なり　又ふるの〻野ハ野にハあらで　ふるきといふ詞也　但大和の布留をいひのてよめるハ名所と云へし

○永宗女御集　あるひとくちにおふて女御のもとより

能廉山ふるのなか君かみもきゝあらきにそおもひけれ

○夫木抄ハ新路集　古朝臣経信

新道ぬ常まくらぬ秋ふるハまよひやせまし　ふるの中みち

千代古道　ちよのふるみち

歌学名所家集に山城国の名所とせるハ誤之　このふるも　非名所之

○嵯峨の山みゆき絶にし芹川の千代のふる道跡ハ有けり

○撰地吐懐編上　嵯峨天皇芹川野遊猟事しはしは見えたり

日本後紀に数見えたる也　是千代古道とハ百十余年に

及ひこれハ行幸の御跡の詠なりけり　未久しからさりきなるを

かくてよみけるにて名にハ有りさる事　嵯峨天皇の御子

ら淳和天皇も度々行幸しありし　ハ日本後紀に有

されハ道と千代のふる道といふ名見えたり

○夫木抄第二　若菜　建保四年百首　従二位家隆

来ぬれハ千代のふる道ふみわけてこれ芹川に若菜つむらん

棘道　おとろのみち

○風雅集　春上

ふりまさる雪もきえつゝ春日野やおとろの道の草の下もえ　前大納言実教

○新拾遺集　雑上

春日野やくもらぬ月の影なれは棘の道の跡はのこれとも　前中納言定資

○新続古今集　雑上

春日野やおなし棘の下なからことの葉も春も年をつみけれ　前大納言実名

末たまきいひし後そ春日野のおとろかしてや神もいのらん　権大納言為遠

○六百番歌合　雑　廿八番左　定家卿

かり衣おとろの袖もたえくりうちはらひこゝろゆき野風さむけし

荊の石　家林拾葉六

都路　みやこち

○赤染衛門集二　一条院まさふらひし右京の命婦和泉守の妻
にてくたるにいひやる

都路の月もたのしく思ひして君こひになるとおもふこゝちかな

○後撰集十六雑二　使りにつきて人のむかへにまかりて京に
久しうまかりのかへりさりける時にあるともたちにつかはしける

都とは見し都路のたえぬれはことのはやまうみとふ人もなし　読人不知

よきみち
よきり道之撰知て行ぬ方へゆくをいふ　横道

○赤染衛門集中二　知れる人の物語に　語らひてよきみちをしつゝかくれてが
清水まうでハ他の人を隠して　ねうるを知りけりと見えんとおもひて
常にさるは横道よそするとこそいはれあれ　なりゆるれふハ嬉しき

宮道　みやぢ

宮路ハ天皇のおはしましたる都の宮居の通路を宮路といふハもとよりなれど　都路といふ同じおもひなり
又それをもとして　今日地名となれるは参河国宝飯郡宮道郷是之　ここを宮路山ともいふ　催馬楽の貫河の歌に
ぬきかはのせゞのやはらたまくら　やはらかにぬる夜はなくて　おやさくるつま　これ　おやさくるつまハましてるはしも　しかさらハやはぎの市に沓かひにかん　くつかハゞせんかいのほそしきをかへ　さしはきてうはもとりきて宮ぢかよはん　今按ずるにこの貫河ハ於宝飯之といふハ行くさきも参河国宝飯郡の中に宮道を和名抄に出して其や知と訓ありこゝの不審之

〃ニ云路　山内しく此ふ之續日本紀　文武天皇紀ニ
大宝二年冬十月乙未朔丁酉鎮奈諸神為將幸參河
国也甲辰太上天皇幸參河国ことあこの時の歌ハ萬
葉集巻一ニ初り此時の頓宮の跡今もあとしふ所の
和郡云路なるへし　云路の池も此所ニ在六帖ニ歌
初り

〇万代集
天津風ふきてふかえらちはさん云路の櫻今さかるらし　〇夫木抄廿一

奈良関路　ならのせきみち
〇夫撰集
名のミして跡たえまりけこひのあ坂奈ならの関路

中道　東のみち
名所にあまたいつくにもいふ之
○夫木抄卅一
いとひまる依裡の中道　茅葉本さり　我意になる一夜橋の里　祐挙
○新撰髄脳
雲月の路りにてきこ之　錯多の中道橋もとろに

七道

七道ハ五畿の外を始めて文武紀に見えたれとそのまへ崇神紀にハ四道将軍をつかはされたり北陸道東海道西海道ハ崇神紀に見えて東山道ハ景行紀に見えて山陽道山陰道ハ成務紀に南海道ハ天武紀にミえたり

新勅撰和歌集序 京極定家 あつめられ我君天の下しろしめしてよりこのかた十年はかりの春秋四方の海さゝ浪しつかに七の道の民の草葉まてなひきよろこへり

七道の首 [illegible]

吉蘇路　きそぢ　小吉蘇　美濃

〇三代實録 第三十六 元慶三年九月四日辛卯令美濃信濃國以縣坂上岑為國堺縣坂上岑在美濃國恵那郡与信濃國筑摩郡之間両國古来相争堺未有決時貞観中勅遣左馬権少允従六位上藤原朝臣正範刑部少掾従七位上靱負直継雄等与両國司臨地相定正範等撿舊記云吉蘇小吉蘇両村是恵那郡繪上郷之地也和銅六年七月以美濃信濃両國之堺径路険隘往還甚難仍通吉蘇路七年閏二月贈美濃守従四位下笠朝臣麻呂封邑七十戸田六町少掾正七位下門部連御立大目従八位上山口忌寸兄人各進位階以通吉蘇路也今此地去美濃國府行程十余日於信濃國最為遥近若為信濃地者何令美濃國司遠入関通彼路哉由是従正範所定

○河社 契沖　三代實録云々　略之同上　笠朝臣麻呂の吉蘇路を
ひらかれしことハ續日本紀にみえたり麻呂ハ淺からぬ家しき御孫
湯沐邑とぞし人之吉蘇ハかく美濃に定められしことゝいへりなれば
あまたといふあまたのはらん言よりも今は多くは信濃の者なりと
のみいひなれり信濃路やきそのといふなれハ信濃へ通ふ人をこめ
の吉蘇路なれ　美濃路ぢしくたがハせて

○續日本紀 巻六 元明天皇和銅六年秋七月戊辰美濃信濃二国之
堺徑道険阻往還艱難仍通吉蘇路
同七年閏二月戊午朔賜美濃守従四位下笠朝臣麻呂封七十
戸田六町少掾正七位下門部連御立大目従八位上山口忌寸
兄人各進位階并従六位上伊福部君荒當賜田二町以通吉
蘇路也

木曽桟道　きそのかけち

木曽のかけち
○山家集
駒なつむ（きそのかけち）の喚子鳥これも思ふ数まさるらん　○又木曽子 西行上人

○活所遺藁 巻一 東山道紀行廿四首中　岐岨桟道
遠落羣山水長流数国中貧看奇絶処忘殺此途窮

東海道

昔の路ハ今の往来とハかハりて美濃なる中山路のうちより
美江ハ美濃路を経て尾張へ出て今の路を通りて駿河
より足柄山を越て小田原の方へおりたり　其の比の紀
行太平記等に書る所にて知られたり

○太平記　巻二　俊基朝臣再関東下向之事　文繁けれハ略して
別に紀行記抜　其の巻全文あり　書きたる地名のミを出す

帝都　逢坂関　打出浜　鳰海

勢田橋　宇根野　守山　篠原　鏡山

老曽の森　番場　醒井　柏原　不破関 美濃

尾張　熱田八剣　鳴海　遠江　浜名橋

池田宿　天竜河　小夜中山　菊川　大井川

嶋田　藤枝　岡部　宇都宮山　清見潟
三保崎　興津　蒲原　富士　浮島か原
車返　竹下　足柄峠　大磯　小磯
小ゆるぎ　鎌倉
太元二年七月十三日に六波羅（云とされ冥東之下向
なれ八十五日の比京を出られしと見ゆ東に七月廿六日
の筆将軍鎌倉に着すとしるしまれ八十五日の日録
まれなるなり

○東海道
○慶原之吉集むさしのゝうらに家志げかつるのうて東海樹（あせち）家侍
夜やまあり其のへらひに立つるのうめのまとまに葉をさめて
それに
ことしゃわ君にまとせぬかつるそ とまうかいさくにすとめ
出る

東山道

○活所遺藁巻一 丙子春三月東山道紀行廿四首中雨中出洛
為赴東山道遍尋處々名應経吾罵郡只欲雨長晴

箱根路

むこまち

按ずるに延暦十一年に不盡の山焼て砂石の飛ちり
ふさかれるに依て足柄の道かよひ絶ぬるにより初て箱根
の路をひらかせられしかとも次の年に又もとの足柄の路にかへ
されたりけるよし見ゆるに今ハ此路の三島へ通ふ路となれるとかい
つしかれし足柄の路ハ坂東ゟれたる方禁裏の防又の注文
なとにみゆ足柄の路にかゝりて子児のよひ坂なと云ところに此
路のありしとみゆ路も更級日記なとにも此路を通りて箱根へ
かゝらぬ今の矢倉沢まての路をさて大山の麓をめくりて
路ハへたゝる所よ大かた絶たるの比ハ此箱根の斜をこえて
足柄にかゝる路の絶たるに箱根を越る貞観六年七
年の比も富士焼て甲斐駿河の此堺まて焼つゝ又足柄
ハ延暦より貞観の比まて富士の烟も立ゆく也大きに焼

ぬる故に丈草のうらみてこその後ハ絶し　また近来の比まてハ去
ても烟ぶるといへる事もみえず　昔ハ筑荷といへり　万葉集
まて古人の荷前の箱をもよめる　又当時荷前の使なといふも
許多之これハたふきこと山中にありてこの山をめくれる者
其ハいふれいふ事ハ　二山古今にて並存事あるて　いふ事を其の営と
思ふに世て筑荷とハいふなりしく　蔵を守根といふハ借字
なそ筑紫の略之

越路　　こしぢ　　三越道　みこしぢ

越前越中越後の三国をむかしハひとつにて越の国と云
古事記にハ高志と仮名にかけり　京より北方の国を
こし路と云　またこし路ハこし路といへり　三越へ通ふ故に三
ハ三なりといふもあれども三越ハ三越路の義にて三ハ美
とふに同じく営家の説にて云　三越の義に是なり
播は近江の三保の義にて営家の説也　又三前漢の名なる
いかなれどもいつかたも覚知いかさらてミなれて熊野　三山
三神三坂の義名同し

○六帖
人知れぬちの山をたつねて越路のこゝろハくやしき

吾妻路　あつまぢ　又　東路

東海東山北陸とも都より関東八州へかよふ道まではなべて東路といへり　故に都より東への道を東路といふも同じ

○拾遺集

東路の野路の雪間を分て来てあはれ都の花を見るかな　藤原長能

○新勅撰集

吾妻路の野ちの草葉の露しけみ行もとまるも袖ぬれし　読人しらず　ぬれて

○夫木抄廿　懐中抄

あつま路を行つくしてそ栗田山人よりこえて君をこそ思へ

○哥枕名寄

東路の足柄こえて武蔵野の出てそめ月を見るかな

○新撰朗詠集

東路はいかに人の宿かれにあふ坂山はきりこめてけり　藤原惟成

驛路　　うまやち

驛路鈴

○清原元輔集 能宣か伊勢へくたりける供にまかりけるに

むまやの鈴のおときこえ 行もとまるも　うちぬかな

今按ニ驛鈴ハ玉を緒へつる その数なとハ公式令ニ

見えたり 奉幣使ハこれを緒けて 行をされハ時の

面目なりけるされハかくハいへる也

阿はの北つぢ

○大鏡第四 右大臣師輔 この九条殿ハ百鬼夜行にあはせ給へるハ何月何日とハえしらず いみしう夜更て内より出させ給ふに大宮より南ざまへおはしますにあはゝの辻のほとにて御車のすだれうちおろさせ給ひて御車の牛もかきおろせ〳〵といそぎ仰せられけれハあやしとハ思へどかきおろしつ

○うらつぢ　卜辻

○元亨釈書十四 京ニて天慶年中へ ある市ニ猫何ゝ京を出ふて出ちて行けるに うら辻にてそこ

○辻　通子　山城名勝志十五　四天通子○

○雪嶺文集云　后人指造像之地曰四天十字云々　○按ルに辻ハ和の俗字にて徂来翁云達字の略字なりといへりやすくこたへらはまろハ十字の義訓にてあるへし唐山にも十字街といふハちまたハち辻の事也四辻を漢書にも四通之衢といへるハおなしつゝきの義なるへし

○明月記元仁二年乙酉三月十二日未斜以後南方有火不遠之車輅冷泉類人等云　少将井辻子之内也

辻子　つじ

○明月記寛喜二年六月廿四日云々　即向按察同近衛南辻子下籠一人乱

四通之衢

俗ニ云四辻なり 十字街とも云り

○前漢書八十四翟方進傳兄宣親屬二十四人皆磔暴于長安都市四通之衢

八衢 やちまた

○古事記上科詔日子番能迩迩藝命此豊葦原水穂国者汝将知国言依賜故随命以可天降尒日子番能迩ゝ藝命将天降之時居天之八衢而上光高天原下光葦原中国之神於是有ゝ

四會 五達 六達

○文選 蕪城賦 鮑明遠 重江複関之隩四會達〔五達〕六達之莊 ○注李善曰洛陽記曰銅駝二枚在四會道頭 爾雅五達謂之康六達謂之莊 ○莊道也

○七道辻

四宮河原 大津街道山科　木幡里 宇治街道六地蔵町　造道 竹田街道上鳥羽

西七条 丹波街道桂里　蓮台野 長坂街道今鷹峯村　深泥池 鞍馬街道

西坂本 若狭街道今一乗寺

○盛衰記

西光法師当時ゆゝしき利生を發せり 七道の辻

ことに六体の地蔵并を造奉り 卒都婆の始め上て 道場を構て

大悲の尊像を居奉り 廻地蔵と名付て 七箇所に安置せ

比叡辻　　ひゑつじ　今云 へいつぢ　近江国

○太平記ニ 師賢卿山ニ登 主上山門へ臨幸なりて 暁

里々より馳参る兵は山上坂本ハ申ニ及ばず 大津 松本 戸

津 比叡辻 和仁 堅田の者共迄も 馳参る

板田橋　いたゞのはし　大和高市郡

新字名所集ニ擬ほと云ハ誤之

○万葉集　第十一　八雲御抄

小墾田
をはりたの板田橋のこほれなハけたより行んなこひそわきも

○勝地吐懐編上　右万葉十一の歌之をえたることいへるハ

もと誤り之　ことなり　小墾田とも小治田とも書てをはりたと

小墾田宮とて推古天皇のましける所之後日本紀

巻廿三
云神護元年十月己未朔云云是日到大和國高市小治

田宮とあれハ板田の橋これにて引返て在不知　そ近方

今案ニ板ハ誤にて坂田橋か　下の歌之事釋書集

小墾田坂田尼寺といへり此寺俗名ハ金剛寺といふ推

古天皇勅使を以て近江坂田郡の田を施けらるゝこと天
皇の御為に此寺を建立せりされハ坂田寺といふ名
南淵山細川山より川落合て坂田寺のまへに至ると
中世ハこれに渡せる橋を坂田橋と云そ皇極紀に
百済寺よりしたハしく小墾田の宮に移り坐けるとき
に蘇我大臣の橋を渡りしことを伺候て經歴と訛語を
たへるもあるを中にて論しひけるより見えけり橋ハ云
坐と名つくいなる小墾田と今の名に合せて見るに坂田橋也之
上坂田といへるをいはまたみえてこれと坂田を云ると
比ものゝしてハ定したるとあるし

〇万葉集第十一　人麻呂集中寄

〇堀河院初度百首　仲実

けふ渡て若むしまくりをそたての坂田の淀にひそ見たなき

〇夫木抄廿一　登蓮法師

行わたる坂田の橋もけふ橋ハいつもる年とて年をへにけるや

〇堀河川初度百首　基俊

我ハ若し妹ともまとしをそえたの坂田の橋をいへふまし

〇夫木抄　栗種正

君かゆかり小墾田川の水くもあるらくよりあらん橋ハなやし

岩橋　いはばし　石杠　石梁　大和国

○中務集　人まゐりてある女とくあきらのかねまさ
いかゞせんたえまかちなる岩橋をたのミはつへき人とあらなくさよ
なか
久しきにつゝきくめちる岩橋のおるゝにたゆる心とそきく
○後撰集十三　読人不知　かれにける男のおもひいてゝまうてきてなにといひてかへりて
かつらきや久米路はつゝく岩橋のなかしても　かへりぬる哉
中なかそかへる人もなきかつらきの久米路の橋ハ今もなやらし
○名所集
かよひこしまきの岩橋たえしまゝ今もさこそす　嘆る山吹
○拾遺集
岩はしの夜の契りも絶ぬ可し　明るつひしき葛城の神

○爾雅　梁莫大於溴梁　○郭璞注梁即橋也

圓機活法　五　或曰梁石橋也石杠音江謂之徛音奇亦石橋也凡橋有木梁石梁舟梁漢又作霸橋以石為梁

○小大君集

ふみ見そつゝしもあてぬ岩橋のなかくなかそらにていふる

○楝衣抄

岩橋をまつくたまつりさきさやたえまやあらんかつらきの神

○夫木抄

ふる道ハけハ木の下くらき岩橋のこたりはほをふ苔むす

○楊升菴外集　六　趙州列石橋望之如初月出雲長虹飲澗

○石橋　砅

石橋ハ二つのきちなる橋を石柱石坂にてかけたるハいつくの橋にても一つハ水の流れの深き所ハ橋かくるまでもなき所ハ大なる石をならべ置てそれをふミつゝわたりけるをもいふ也庭まにてさゝめ之

○西溪叢語　砅都知切又力智切又力制切詩深則砅今詩本皆作厲字砅出集韻類篇履石渡水也

岩魚橋　いはのかけはし　石枕

○白河殿七百首　山家林

かつらきの神もやこれもかこちけむ人めもたえぬ岩のかけはし　御製

○濱名の橋　ますみのあし　孝信

○更級日記　濱名の橋ハくたりし時ハ黒木を渡したりしこの度ハ跡たにみえねハ舟にてわたる入江にわたりし橋也との海ハいといみしくあしく浪たかくて入江のいたつらなるすとかく物もなく松原のしけれる中より浪のよせかへるもいろいろの玉のやうにみえまことに松の末より浪ハこゆるやうにみえていみしくおもしろし

ふきこの記　志の菅原孝標か女八十三歳にて陸奥国より都へ上りし時のこちの事かくあれハ其時の事になりてありしハ六十一年のおなれハ八十三年の時の事なれはよくえんなるへし其日記ニ天長三年ニ夢見しこと

○東関紀行　橋本といふ所ニ行つきぬれハ聞しにもすくれかひありていとおもしろし南ハ海潮の海はなれて人家甚ニつらなり湖ハ潮をさそひ出てとこ

○源三之集 宮方一夜のもとにみちのくへわかれしか濱名
橋をいふらんとこゝるにたやうやたにたれハ
わかうへの濱名の橋ハやれにけりうちわ何ほやまうこゝりらん
○拾玉集七 仙洞付家合 名所五首
雲あらく松風さそく波の上に濱名の橋をこれはなりなん
○續後撰集 旅 前内大臣家良
朝なけ濱名橋ハとたえして霞をつたふ東の旅人
うちわたす濱名の浦を見わたせは波あき湖の海路のうかる
湖のおもてゆるかしきめつたかくとおひつきたる松の木立なると見
えかく遥かしくそ見ゆる
○三代實録四十六 遠江国濱名橋長五十六丈廣一丈三尺高一丈六
尺貞観四年修造云々
○扶桑略記 元慶八年始作濱名橋長五十六丈廣二丈三尺高一丈
六尺

遠州濱名橋 萩原随筆
扶桑記にハ元慶八年始作れ長十六丈廣二丈三尺
高一丈六尺 云々
○拾遺集 平兼盛
湖にて舟をとにゆふ旅人や濱名の橋と名つけそめけん
○新後拾遺集 玉道
こゝ杉入るまてくなりまけり濱名の橋のきりの比
○清少納言記
ちかう(東の方)へとおりてハふるきの跡をのみわたりてむかし濱名の橋見さりきや
橋ハあさむつのはし
○堀河百首 河杉
東路の濱名橋の木杉波ハふれすまけかたてられ
今ハこゝも橋柱さへ人もなくて濱名ハうりをまつつるか

うたゝね 阿仏尼を江戸へ下向記と 云出て立かへりにあはれいかなる夢のうち
みなれぬ濵名の浦にておもしろきおほかりけるは浪荒き潮の海路
のどかなる湖のおもみる けぢめなるあはれと見て続き松の
木立なきを絵にかくまりうくぞみゆる
いざよひの記 阿仏尼鎌倉下向の記 浜名の橋より見渡せハかもめといふ鳥
いとおほく飛ちかひて水の底へも入ぬ岩の上にもゐたり

○夫木抄廿一
東路の濵名の橋にかすみたる 基政

同 廿一 源仲正
家にとてつゝはふきの濵名より ともしの里の妹ぞこひしき

同 廿一
遠江なりにし 大蔵卿為房
[illegible]かはらぬ濵名の橋の松のむかし立

同
万代集 雅有

松風の濵名の橋をわたりてよの曙つげゝき 松 波のこゑ

同 現存六帖 慈鎮
波の上に入ぬる松の梢より濵名の橋を渡る風ぞふく

○建保百首 僧正行意
あはつ見るめも知らぬ波の上を濵名の橋をこひや渡らん

○拾遺愚草
東路や濵名の橋を打渡り [illegible] あふ坂の関

○壬二集
打渡す濵名の橋の入塩に棹さし小舟 [illegible]

○夫木抄廿一 長房
沖つ風高師の浦の夕霧に濵名の橋ぞ見えける

○ 宗尊親王
草枕夕ぐれ遠し塩のぼる濵名の橋の秋の夜の月

○宗祇方角名所案　濱名の橋ハ舞坂より北の山際之橋本
より三里余り北之方ハ濱名を湖水にせられ舞坂と云
高師山の麓ニ今も有橋本ハ今の湖水なり

今案ニ濱名の橋ハ中比潮ニきれて此所今ハ湖と
海との境の道ニ成りて世ニまつさき海となりたる所
なるか　の洲崎　螺貝の口より出くるを云
但しここ汲ハ今切といふ之今もなお道の跡の見ゆる海の
方ニのこりて見ゆ

遠遊紀行　山崎闇斎　今切　明暦四年春
螺貝何時拔做濱
篙師浪語太奇生
想應開闢氣機發
終古猶存今截名

○再遊紀行　同人　万治已亥仲秋　今切渡
驛隷解騎駄　吾奴買艑艖
渡過今切客　話出古年螺
雁字連天際　魚梭擲海波
風流無限好　一棹欸

古の濱名の橋乃跡ハ駅の方ハ今の荒井の宿の西南ニ
残りたるにて橋本村といふ是也なり古ヘ橋のなかり
しまて難所なりし然るに此より南へ新しく出たる海路
のなりし也東方ハ舞沢（坂之）の松原一筋あり其先ハ
海と湖とをせきわけて其の外くなるの間松原と橋本
の訳とあり此ら和名其のなきの湖の南海へ流至路
に和なるに橋をかけてありし也高師山ハ即ち濱名郡
まて白須賀と荒居との間海辺より北の方にある子
高師山夕こえくれて麓なる濱名の橋を月を見るかな
又
高師山梢夕日静かに橋もとかけて月渡る見ゆ
是等まて思ひやりしその海中のなかりハ舞坂より
残りたるは東福寺の虎関ケ紀行まて左海右湖同

一碧長江合含西波瀾とも作れりその古画にて見
しは丹後の天の橋立駿河の三穂に似たり文徳実録
にありて云ふ浜名郡角避比古社の前湖一口去て開宝
河りて塞れハ民の憂となれるよし見えたるも其浜名橋
の下乃きれとのふくれハ水の湖より河ふれて田をそこなふ
故なるに十二の今訴の荒井ハ浜松のまへふちの郡之
内江湖の京近き故にちかき河なることを言ふなりて此湖ハ
荒にをもれハおほつかなきことといふをこ音便にてとおく
とハ名付しかく浅海にありて此水を湖の郡といふ也
荒井ま古ハ今の所とハかハりて浜名の郡にそやありし
知くしたる浜名川の末にかけたる橋なれハ浜名の橋といふ
いへる於三代実録に元慶八年九月遠江国浜名橋五十六
丈広一丈三尺高一丈六尺貞観四年修造歴二十四年既

破壊以勅彼国正税一万二千六百三十束改作焉と云なり
又源重之家集に橋の焼しを見て 増基法師の遠江道記
に浜名の橋の毀れたるを見たるよしあり更級日記にも浜名
の橋かりし時ハ黒木をわたしたり此度ハ跡とだに見て舟にて
てを渡るとみえハその時も所々とられたるよし或人ハ其
ま橋けるなれハ此記を引きたれとも程その跡の所の何仏の記行
ま此橋の事たしかならす それハその時より絶
らしその時所々に崩れにしかハ時ありて又その後の何ゝより
八修造なしとて之のかく橋を渡しけるにや其後出
人の御従にハ慈永三年八月廿日頃なれて橋けたり
亦か中かれしを又永正七年八月廿七日地震にて其の渡し
松原も皆出崩れぬなれハ今切海の湖の際をきせてひとつ
に成て昔の跡なくなれゆりして 浅水を今切の渡と

云すしもなひぬ是等の事人のいへるを見ハ事しおきし
証りのまぎひを考へ合せて書しつけぬ後の世の便にして
きまるへき也

橋本　はしもと

今東海道荒居村の宿の西南に續きたる所を橋本村と　さはし本
いふ是即ち古へ濱名橋のあたりなりとぞ取説なるべし

○名所方角抄　濱名の橋ハ荒井より西の山際之橋本より三
里余り也之古ハ濱名を海にせられけり本坂といふ高師山
の麓にあり今ハ其橋本ハ今の海なり之

○新類名所集
高師山松に夕ゐる鷺の橋もとりかけて見わたる哉　基家

吊橋　ちやうはし

吊ハ釣と同しく用ゐて釣橋とハ云ふなれハこの方まて云ふ也也
しまて橋板をしにあまたおもひまかせしをいふ之吊ハ釣と同
しく今の桟橋なとつるすをも吊と用ゐる　西土の俗語之

○贛州府志四營建志正徳辛未周都御史南贛治一新云三面引水
為濠南衍西北貌自西津門起至鎮南門吊橋止計長五百五十
二丈闊一十三丈深淺不等又自南吊橋起至百勝門吊橋止計三百
八十五丈深五尺有奇闊一十四丈舊有十三門

と九元の部　戸綱橋　陸奥

○帰輩日記上十　九月八日すみれ野をはなれて草のみ露にまさり
まなれこれハ人のゆくとれ御けんと見ける又はるばるさすきれのぞり
とこれをとしるとへいえ　かきつく
さて　かりに仰を　はせるそこれハいかれたる　宿元にすみとすん

○堀河院百首　俊頼
いさやまたふみもみぬ山さとすれハ戸綱の橋のこゝろもとなされ

と綱の橋　俗云とゝろきのはし

○陸奥十府の浦をさして古の河辺を陸の細道と云と見え
此の岩切村の様々谷の両ある　せゝらぎに渡せる細橋
を宝家にゆゑをちこちの人をかよはせぬと語りつたへ
の橋之今ハ其名さへもと綱なりと其処の人ハとゝろ
きの橋といふ

小河橋　をかはのはし　陸奥　筑前同名ア
をかはの里　同前之　陸奥筑前いつれとも知連さるな
○落か題之記　橋ハをこかはのはし
○夫木抄　懐中抄　読人不知
陸奥の小河の橋の河内に橋の名しもむかハ名をたのむん

小川橋

筑前ハ三笠郡　陸奥ハ宮城郡

○拾遺集　物名

筑紫なるおもひそめれとはとまなし出ての（を）かえの橋のこなる

○撰代吐懐編上　是ハ八雲御抄ニ筑前とあれとも千々の後ハ此他只宮城保ニ小川橋ヘ下りて深川をよまれたる所伊勢物語ニも物名をよめる所なれはそれにもよめと又一首題ニ見えたるの哥をよみたる事是れのみ陸奥なるハ佐くにもありまたそれとハいかなるまし哉ニ入りて吾妻なりともいひ陸奥みえよまへ哉なりとしふ

小野江橋

壱志の郡　伊勢

○夫木抄廿一　秋雲　光俊

うし不会いつまでか年ふりてや橋ばしら小野江のはし

○今案ニ是ハ其の書生が故実をとり出て附柄の橋としをこよせし之

鵲橋　　をたえのはし　　信英

をたえの沼

○源氏物語　藤袴巻

妹せ山ふかき道をハたつねすて　をたえの橋にふみまよひける　柏木

○狭衣物語曰

ふちさへや鵲の橋ハかよひえて（?）とたえするにも通ふ道あり（?）　狭衣

渡辺橋　　いさゝめのなし（?）　　梅伴

○二川分流記下、永禄十一年戊辰九月十六日中嶋門浦口ニ而

ニ古塚有、渡辺橋渡辺の塚是也、此処ハ足利（?）年細川方国住（?）

人の御付前也、渡辺下向（?）而浦上掃部助渡辺於（?）而ニ渡

同公年（?）渡辺橋麿（?）長作三ケ所流三万余此塚へ渡入て

此時浦上並天王寺本陣難波今宮渡辺（?）ノ守村ニ陣在之

其時渡辺橋渡ニ順ニ橋をかけられてその時防戦流陣而

ハ住吉吾孫子田辺里小椽（?）讃岐（?）迄之の口堺筋（?）ニ而日々

ニ取合ニ事（?）天禄四年六月昔今年甲午年以前（?）ニ而

○太平記六　楠天王寺出張ノ事　楠正成の勢を合せて七百余

騎ニて和泉河内の両国を成敗して大勢ニなりけれハ五月十七

日ニ先住吉天王寺辺へ打出て渡辺の橋より南ニ陣を取

中略　隅田高橋打まけたりける五千余騎の兵ものこりなく（?）打

あされてたふし事をんとよみける其の翌日より任を去りて出之　六条修理大夫
よこれを見て一首の哥をよみける
いつまでの身いのかはりてやけきは何橋落ちまでなかるゝ人
京やうしくの名せるれは渡後古きを古に作りて祝ひ或は作り付て
いひける昔暗田の橋面目をうしなひあやしく出仕をとゞめ居ける
しておるとなりける

鵲橋

〇千載集第名　かさゝぎのはし　一云周防国又土佐国の名所なりとも云

けさゝりや沢道の水にはけぬる人をもかけぬ鵲のはし　季能

〇夫木抄一　元日

判云　忠良曰東方朔傳朔日風従東方来鵲順風而立是以知東獨鳴也

〇事文類聚　前集第三　以鵲占風　題孝武坐未央前殿天新雨東方朔屈指獨語上問之對曰殿後柏上有鵲立枯木上東向而鳴視之果然問朔何以知之對曰此以人事知之風従東方来鵲尾長傍曰則順背風則蹶以當順風而立是以知也　朔傳

〇歌林拾葉　第一　沢道のおとけぬる人とよめるは東風解凍を云ふ哀傷の部まで伝り人又鵲橋とあるは古詩より鳥鵲橋連浪往来となり又袖中抄云孫婚式云銀漢鵲之會橋在夜

遊而降風霜と云詩あへて只宿といふ事なしといはまし之
家持卿も鵲のわたせる橋とよみ給へり天の川をいふにもあらず故
まよひ出るこの説甚だ大きに難信因之古来も古今の説多細
其事つまびらかなり

○夫木抄

天の河雲の衣をかさねたる日はまだ見えぬかさゝぎのはし　民部卿為家

あまの河雲のみをいつもて海神も鵲のはし　加賀

冬の夜の雲の衣をたゝみぬるその中なるかさゝぎの橋　読人不知

或書云用捨也又当代の歌名所と云未詳

鵲橋　歌林拾葉　三

さみたれにこえし中川のせやあさつれかさゝぎの橋　藤原為家

掛橋　かけはし

○詞林採葉抄甲斐国志良田村此辺人家四十軒計乃大雑木之掛橋ハ九尺五寸斗ニ渡る木数ヶ所ニあり此内橋三四間程乃橋アリ凡ホトを渡りて出る所あり西乃宮寄る毛毛再ヒ渡る事なし此本乃田村より拾柳子寺まて出る村中此ある毛ホト此本谷を隔てて流るゝ川く隔つ也

棧道　かけはし　梯

木草のかけはしを棧道と云ふハあやしき棧道ハ今もいふ廻廊といふに似たり大和の伯瀬などの山路に作りかけたる廻廊ハさなから魚橋之本草のかけ橋ハちとたかくなる似たりさ蜀の棧道などいへるハ廻廊とハ異にして屋ハなし堂橋のさまに似たり古ハ閣といへるハ屋あるをいふ今なれともこの棧道ハ山の峽谷の谷に作りかけて高き木ハ閣のぬくひきし木ハ橋のぬくなれハいふとみゆるなり

楊升菴外集ニ棧道顔師古曰棧即閣也劉禹錫有山南西道新修驛路記有云我之提封距右扶風觸劍閣千一百里自散關抵褒城次舍十有五云々又云棧閣盤虚下臨谿谷層崖峭絶枘木蜡鐵因而廣之限以鉤闌狹徑深阻從而拓之方駕從容棧閣之制亦可想也　○歐陽詹棧道銘有云秦之坤蜀之艮連高夾深九州之險也

○宗久紀行日記に其日若林に塩竈の浦にいつきぬ　非依ハやかて
塩竈まていさゝせかに湖前に通郡侍りぬ侭にうつの末に宿る
今海に松嶋なくかけて浦々をなに過ぎたる所々又磯ちかき
をしりて山の陰をわけ行ぬ

棧道

○古今原始云暮成暁　漢高祖帝張良至褒中説漢王焼絶棧道
○棧即閣也即今之閣道

○風雅集　賀　承保元年大嘗会主基方作者詠之
大江匡房　丹波国
みつき物はこふ船瀬の梯に一荷のひつめの数そ継せ哉

○源重之集

女のおやいさめ侍るとて 埋木橋しも 誰まてにかへるにかたつしく

○後撰集十 恋二 人の物見に出る車を見て心つきて

あなたに侍りけれは たれとたつね問けれは出ける家のあるし

とはせてつかはしける

ひとつまにこゝろあやなく桟(かけはし)のあやうき物は恋にそありける　読人不知

同十四 恋六 男の常にまかりける時は つまにきくてきける物

いひて後は門よりつれともわすれこさりけれは

たえさりし昔たにみし桟を今はわたると音(きく)にのみきく

○夫木抄廿一 すゝ上けるに　権大納言宣家

ふもときた雲のかゝるに行人はあふきし本あすの桟

同 洞院摂政家百首　定家卿

あき日原の雲のやまかまれに中絶てつきもせぬ山のかけはし

がんきやう

雁木橋 俗にがんぎ出り

俗に雁木橋と云てハ首刑者交ヽする謂なれハ此の義ハ関外のふを

しされハ其の中にも実太没之なりされとも此雁木橋よめり

あるハ首に有れハ思ハくこそ本意なしつ

○白氏文集廿二 和三月廿日作　女墻城似竈 雁歯橋如鋸

○同廿六 問江南物 律蘇州舫故龍頭闇 王尹橋傾雁歯斜

○彙書詳注　雁歯橋上級也 橋似雁歯　○引事始

七字訣

淀継橋　よどのつぎはし　橋作

此字名ハ和歌集八雲御抄にも見えて山城国と出たり
かれハ淀川の橋を云なるへし　然し　なから古抄浦を讀
今世ノ歌詠ハ全く橋作に

上

○千五百番歌合　家長

春日野の淀の継橋とだえして見えも夏(?)の名を流して

○夫木抄

曾川の淀の継橋いとしく春風つゝる柳作する

現存六帖

絶えて見るめにもあらぬ中の浦に流れてひをの淀の継橋　隆祐

中津の浦の小萱の篠に吹はへし時雨る波の淀のつき橋　宗尊親王

○萬葉集上

五月雨に淀の継橋絶にけりひまなくつたふ中の浦舟

○大字記

宇治橋　たまよの元　紀伊国伊都郡

宇治郡に有橋にて世には云冥の橋といふ是之

○大木橋　法性寺大路南口

大路やこの先に宇治橋有人あつまりにたらハかり人

玉江橋

猿楽山姥の孤松に住侍る若之寺へ下るにゆきを出て

此はや志賀の浦にこれゆく末ハはるちの山こえて袖

に露ちる玉江の先ハ見て末ある城陽の橋とうたふ　京

より小陰原へ下る之

玉階　たまのきさはし

○新撰菟玖波集一　みかきなる玉のきさはしにかゝるしら雲
さくらは色かたちなき袖　十輪院入道前内大臣

棚橋　たなはし

たなはしハ平なる小橋をいふたなハ板挙といふ意也日本紀ニ
あまのうきはしのたなはしハたなくもりたるといふ橋ニいひしより
いふ之

○紀貫之集三
白雲のたなひきわたる足ひきの山のたなはしふみてわたらん

○堀河院百首　仲実
けふ落て苔むすまゝをたゝの板田の沢につくる柳はし

緪橋　懸度　かけのはし　笮　橦

是或山間のとぎれ或ハ谷川の水たるところに橋柱の立かたきところハ
あまたの緪或ハ一ツにまかりてこれにすがりて渡る之法にて渡る
ところハあまたの深山或ハ谷之間の上にも渡度すと云

○後漢書　跋涉懸度○注　谿谷不通以繩索引而度
云

○郷瑯代醉編　唐獨孤及招北容辞笮復引一索其名為笮人
懸半空度彼絶壑○按今蜀松茂之地皆有此橋其河水険悪
既不可舟揖乃施植両柱於両岸以繩絙其中繩上有一木筒
所謂橦也欲度者則以繩縛人於橦上人自以手縁索而進行
達彼岸復有人解之所謂笮橦也非目見其制不知其解

西域傳　有度索尋橦之国

○前漢書西域傳 九十六 烏秅国 縣度者石山也谿谷不通以縄
索相引而度云

○今華子岩本郷まても飛騨國綱の渡しといふ名同を獼
猴の昔をうつしてそれに籠付て両方まて綱まて
引て[illegible]之を綱引て[illegible]代官所などいふ所[illegible]の急
みなといふ

釣渡　つなわたし

○飛州採薬記 阿波山因村籠橋大難也之此籠橋長
廿間余幅二尺余[illegible]二三丈[illegible]の川[illegible]して渇
[illegible]の[illegible]上の橋[illegible]眩暈
[illegible]かの橋の[illegible]
[illegible]の[illegible]一尺目[illegible]一本[illegible]の上
編付[illegible]の上[illegible]風[illegible]時ハ[illegible]難[illegible]川の上[illegible]
[illegible]時ハ[illegible]危[illegible]
[illegible]かの籠橋より落て死る[illegible]と[illegible]此橋
を[illegible]を[illegible]かの籠橋を[illegible]
して[illegible]危難を恐れて[illegible]
[illegible]此橋を[illegible]之[illegible]の橋を[illegible]に[illegible]やくすしも[illegible]の
[illegible]危き[illegible]程の難[illegible]之

長柄橋

○興風家集　　　　　なからのはし　摂津国

これてやはれ世にみえてなくさめし長柄橋今はきこてよ

○壬生忠見集

としふれはくちこそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて

○いさよひの記（阿仏尼の紀行　十六夜記）富士の山は是は煙も立す　昔父の朝臣にさそはれて　いかになるみの浦なれは　なとよみし比　遠江の国まては見しかは　富士の煙の末も朝夕たしかに見えし物を　いつの年よりか絶しと問へは　定かに名答ふる人たになし

なからへて　此橋柱くちぬれは　富士の煙も絶ぬらん

夫木集に　大墓寺にて　なからの橋柱これを　とりて

ときはかり長柄橋はくちぬれは　なきものゝことも　ふるきためし

○百錬抄五 延久五年 二月廿日 太上皇(後三條院)御逍遙一日内
到天王寺経住吉天王寺路次過長柄橋御詠
和歌

○袋草紙 大宋寺 家集 恵慶
系のことなからへ橋を渡りけるとき年ふる身となからふる

○六帖三 橋
物の名になかゝのたゝともあるを之 恵慶
さしなから橋は長柄も朽ちぬれはなかれても秋ふかくと釘りしく
同
つのくにのなからの橋も世にたえてかくれなきなのかたのこさまし

○玉葉集
系なからへなからの橋のたえたまゝつくる世あるまてなかるゝらむ

○壬生忠見集
人見れは河なかの橋をわたりそやなかゝりしはなにかへる

○源信明集
なにはなるの橋ハなかりし人ハ昔よりたえにしく

○名寄十四 家集不見 清原元輔
昔より長柄の橋の柱をもいでてこそ見れなかれの滝

○夫木抄 廿一
秋もすきなかれのゝ川は世のなかのうき世をなけきたえやなかる 續古今集 和泉式部
同
なかりしと橋ハ見れともかひなきなかをなからへて名はなかりし
同
柱たえとハなからへの橋をなとかなかひすゝは住吉の里

なからの橋
○壬生忠見集　伊勢にいきたるに　はつうられめのいひける
　なにはきく国にはまた見ぬ橋磨かひくまの浜といふはまことか
返し
　年ふれはくちこそまされ橋柱昔なからの名こそ　かはらてく
○河社　袖中抄云　此女ハ忠見のむすめなりとかや　忠見か橋
　磨にすめるをはかれハ字名を　ひくまのはまとよめる之　ひくまの浜
袖中抄云　家にあらし　其一の歌ハ二のはしとはのをか名流し
　てなかれハ長柄の橋にかけたるは是ハ式部卿か集にもなく
　二ならての橋柱にあるよし忠岑とそ記らるは集にハなく
　此はなりなるにもすみて　おなしハさしはおと橋磨とよみけ
　るをは集にて見えたり

まゝの継橋　　ままのつきはし　袖中
　あつまのゝまゝの入江によするなみのなにゝやまことにいふかひもなし
　橋は末住若詠之　ままの浦もはしことも下総国かつしか
　それとは異本之
○夫木抄六　杜若　建長七年顕朝卿家千首　光俊
　かきつはた咲てや花のいろならんとかくかゝるらしまゝの継橋
同廿一　二丁　おのつからなる人に　和泉式部
　いたつらも朽しはてなてまゝの継橋もなやむらしふみやかよはん人
○名寄　天慶元年四月朝臣家合　判者右大臣
　東路のまゝの継橋よしや世上にすみはつかなり　式乾門院御匣
○夫木抄廿一
　いとしくも恋路にまよふ身のなにまゝの継橋絶のして
竹川の橋　夫木抄廿七

長階　なかはし

長橋と異也是ハまさなし之高殿のかよひ路をいふ廊と云
長階の局とも内侍の職よりいふ也古への鋪尾首道といへるもの也
まあるまなりとの事也

○源氏物語（右大臣）

右大臣（おとゝ）家のあらき宮居けれハ家のなかに言
むまひつるかな　みさきもとめひとこきぬるの色―　御せしハと笑
しく　長はしよりおりて舞踏し給ふ

長橋　なかはし

○夫木抄第二　春下　　光俊朝臣　○新六帖

のとかなる御代の長はしよるとは　ほとこそつけれとも　渡らぬ有る

本邦にての大きなる橋ハ今矢矧の橋を云べし二百余間といへれ
ともその材料桁柱等ハ痛木を用ひて巨材大木に非ざれバ通じ難し江戸
然多の大橋と云ふともさしもせまき江戸の両国橋さへ九十六間之
と云ふとも宝暦年間ニ改造られし時皆ニ木曽山の檜木を用ゐ
られて厚さ七八寸の板にてされバ今年明和八年ニ至りて改る
十余年ニ及ヘ(ともかし営ずがもまさ)再修の費もなし於是
十年を経ともさのミの破損もなし(すこしも五十年一度ニ)下
轂聯隷廿六ニ呉江長橋七十二間とて めづらしきに載られども今
云ふほどのものにはあらず是ぞ本邦の時のみ之

村雲橋　むらくものはし

○夏仁記下　摂政やうかたへ前の河辺宿す源氏のかた和泉
守備中守京極守二万斗乃軍勢一万の御遣の南の門と村雲
橋をこえて追つめまれつせめ戦ふ

山城国

越中舟橋

浮橋

○溶州採薬記　越中国富山より加州の方へかゝる所に足あり舟橋
ありて舟六十六艘をかけ渡す日本一の舟橋也　同国立山芦峅寺
より立山へ行る所に藤橋数十仭あり姥堂西の口方に出るより来
名高家入之　延宝年中の寄附に立しと云其の浮橋の長さ百間横
弐間中の石皆大きなる板の名木を横に三間程と云皆大木なり
浮橋ハ古来有り　讀人不知
浪すく浅間に舟はしきに人ハここに渡る

浮橋　うきはし　浮梁

○古事記上　於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命
二柱神修理固成是多陀用弊流之国賜天沼矛而言
依賜也故二柱神立天浮橋而指下其沼矛以畫者

これはさせる所あ—そく（ゆふう）てソラとあれは天そ
をさしていふ之天上といふすとし

○圓機活法五　凡橋有木梁石梁舟梁謂浮梁即詩所謂造舟為
梁者也　○注謂從舟至舟相編為橋

○文概　為宋公至洛陽謁五陵表　傳季友　始以今月十二日次故
洛水浮橋山川無改城闕為墟

後漢書十七巻彭傳　横江水起浮橋鬪樓立攢柱絶水通云々

○夫木抄廿一
わきもこか住江のうき橋はこえて両の山野の人もかよはれ　為家
同　光俊
○角田川　昔ハきこえし今こそ八名を浮橋の跡なきすみた川のわたり
此ハ康元元年康治秋の中にてけるまゝにて川のわたり
をみれハかの川今ハうき橋を渡したりけれハと云々

浮橋　浮梁　うきはし
今按するにこれハ橋柱をハ立すして舟筏をならへてその上
を渡すを云也大成ハその舟の上にまた橋を渡したるをいふと云
我両舟浮てなれハいふ
○さきまひの記(仏足編序)そのまゝこと名やいふ川また舟と並たま
さきのかつらまてあま人かはらめたる浮橋なるこそ何やうにれた
隔るこの川堤のかたハ深く舟かさくハ渡られた
かゝ関のふるきひハあまりて人めつゝみさきなせ　かゝる人
かりの世の住来そゑるまたるすや身をうき舟を浮橋すゝく
ときこえひつけける
○明月記文暦二年閏六月廿六日(不清)河稲人等渡浮橋右石ヶ瀬(左浜中央)
為(與)防引　佐女牛西洞院野宮掃除経営秘不為人(之)
標栽松

○贛州府志五営建志二東津橋在建春門外、宋郡守洪邁始造浮梁改名恵民嘉定甲申左史鄭性之用鐵索聯舟以濟後廃
○圓機活法五允橋有木梁石梁舟梁謂浮梁即詩所謂造舟為梁者也周文王造舟于渭秦公子鍼奔晋造舟于河○注謂従舟至舟相編為橋○今浦津浮橋是其処

○赤染衛門集十二 ある人こと男のもとにやりける歌をとりてたえて来ざりける
ゝま年月もおもひつけさせし
かれとまさかとかよふ人浮橋のゆゝしのひうきなかゝる

○後撰集十五 前一男の女の歌をかくしけるを見てとかめのかきつけ侍りける 四条御息所女
へたてける人の心の浮橋をあやうきまてもふみ見つるかな

宇治橋 うぢばし 山城国宇治郡
川 渡 里 山 等をよめり

○源氏物語 総角巻
たえせしのわかたのみにや宇ち橋のはるけき中を待わたるへき

同 さわらひの巻
ありふれはうれしき瀬にも逢けれは身を宇治橋になけてまし 一の八

同 浮舟巻
宇ち橋のなかき契りは朽せしをあやふむかたに心さはくな
絶間のみ世にはあやうき宇ち橋を朽せぬ物と猶たのめとや

○大中臣能宣集 宇治のはしにて
まうち橋のかをとてよれる網代木も縄を橋につなきとめけり

○夫木抄廿一 家隆
よしの山おひのへき道をよるよると宇治橋をまつや渡らん

○艸山集廿二　宇治紀事并序　興正菩薩新宇治橋患取漁舟埋之水底造石大塔建乎其上乃教漁人縣布為活業又修橋寺置茶房恵存亡接來往其願力不可測也余遊宇治之日偶聞此事嘗按興正感身記云弘安七年正月奏破宇治網代蓋是年始修宇治橋未成時年八十四夫感身記興正自録一生事業至八十五歳絶筆然興正年九十而卒則其埋舟造塔種々之事盡在後五年之間其所傳不妄矣因賦詩紀云

菩薩願心深高行不可攀漁舟沈水底佛塔湧波間
橋寺度存沒茶房接往還到今縣布地河上白雲閑

宇治橋
人皇三十七代孝徳天皇の大化二年に道照和尚の創架すと云ふ

うちはし　打橋

○打わたせるかりそめの橋也弄花抄に渡殿のきりめんとうち橋と
いへりしてかけわたすと云内階之と見えたり御事まて内裏のうち又
し万葉集にも打橋と見えたり假橋をいふ乎板をもて作り日本
紀神代記下にも打橋と見えたり

○万葉集第二　人麻呂
飛鳥明日香乃河之上瀬石橋渡下瀬打橋渡石橋生靡
留玉藻毛叙絶者生流打橋生乎烏礼留川藻毛叙云々

源氏物語 桐壺　まうのほり給ふにもあまりうちしきる折々
はうちはし渡殿こゝかしこの道にあやしきわさをしつゝ
今案ニ是ハ后宮ニある所中庭廊なとにかくる
橋也

○山家集　　○夫木抄ハ　五月雨
さみたれに水増るらし打橋のくも手にかゝる浪の白糸

○明月記寛喜二年二月十四日云々出車寄小舎餘色金作寄
源庇東面戸立之伝立兩便宜其打橋毀之内へ打入て
寄云々
○同寛喜三年二月十二日氏業随陸布衣へ東庭小門継細打
橋辺云々

井手の岩橋
山吹堰をとゝもに合せてゐる井手門西之　山城志
名寄集
かよひこし井手の岩橋たゆるまて所もさらすさける山吹

大江橋　　　　おほえのはし　摂津国

今俗ニハおほ江はしといふ源氏乃はしニ大江の岸と云
ことあり

○夫木抄

なにはなる大江の橋は作りけん人のかたみと見ていつゝける　　俊頼

久米路橋

○後撰集十一　恋三　くめぢのはし　　大和守菅根

かつらきや久米路の橋にあらはこそ思ふ心をなかたえにせめ

○六帖

葛城や一こと久米ーの継橋は心もしらていさ渡りみん　隔る

○夫木抄

かつらきや久米路の谷の村雲と絶にし橋にかゝるさゝ雲

○雑和集四上左口　あぢの橋うすはいを橋うす

久米岩橋　くめのいはハし　大和国

○拾遺集

岩橋のよるの契もたえぬへしあくるわひしき葛城の神

○小大君集

ふミ見てもつゝしもたえぬ岩橋ハあらくのミこそよるハゆかなん

○堀河院後度百首　仲実

かつらきや久米の岩橋ふミ見てハ渡りかへしと思ひしるらん

○壬二集

いかにせん夜のまも同し橋なれハつゝしもたえぬ久米の岩橋

○夫木抄　為家

ちりつもる紅葉の錦渡てもあやなくたゆる久米の岩橋

久米岩橋　新林拾葉二ノ右　役小角

久米継橋　久米路橋　くめの岩橋　大和国

久米岩橋とも云又同所之

○六帖

葛城やくにし久米路の継橋ハなにもたえぬ心ありけん

○藤原清正集　中務

かつらきや久米のつき橋たえまくも渡しもはてしかつらきの神

返し

葛城やくめの継橋あやなくはつなかりし久米のなかちよ

雲梯　くものかけはし

○蜻蛉日記八下　まけしと思ひつゝなれはまつ
大空も雲の梯なくはこそかよふなけきをもせめ
かへし
ふみ見れと雲の梯あやうしと思ひしらすもたのむなるかな

○淮南子十九脩務訓　王曰公輸天下之巧士作雲梯之械設以攻
宋曷為弗取　○注公輸魯般号時在楚雲梯攻城具高長上与
雲齊故曰雲梯

○百首　藤原之長
宇治川やくろ木の橋のありし世ハ網代も簗もう川へつゝきつゝ

朽木橋　　くちきのはし

○道興廻國記上云　雪ハ朽木ニおちまて　いつしか旅人もまよひつ
て旅人も不知く行れハ
うき世をハいつすてゝも山川やくちきの橋にかゝりつ
是ハ皆様西ニ隠ニ有る

くまはし　　梯階

おもふ事今いふ頃ましまきくれの事之梯おて　つらかさね
旅にかくいふなり　無古庵

○うつほ物語　楼上の下のまきになへきなとの名楼はいろいろあるを
まきくに作りて志らくよりなるへし此ハおもしろく見えく法
合（　）おもしろきことハ世ゝの事にて唐土なとよりも作り出きたる之
○清少納言枕草子にまゐらせなるよしかけて高きとみゆるなとまで名楼の
ありしよし車引にのせて出てゐるよし
○第の根集

八橋　山城国愛宕郡

○蜻蛉日記 八下略 付寄手 八はしのわたりなりけん はじめて
かのきや神代のはし ふみらは八はしひとつにうちとけける人
とるところひはなくて
かへるまゝにては いまこゝは八橋のわたりにて 心もとなきむかひるし
こゝこそはまことに 八橋のふみそめて さとともなる まちむん
かよひつきたなき あとなくのみしの ふみそめてとも なき きゝなん

やつはし

○拾遺集 七恋一　参河本
みつしあるきかは八橋のくもてまでふとはたえせし

八橋　山城国加茂にあり

○夫木抄 八時雨　信救
わたらぬに中ちらしのつゝは八橋のくもてのゆきにまよふ空をなからへ

○新撰和歌集一 大江為基 参河守にあつて下りはべりける ここく
まとき新にちらくなりぬるをいふて家に人といふをとまは
らはしきもとそ

人しれぬ物はおもはぬきつてこちるともたえとそいふ八橋のみ

返し
八はしのくもでのあまのわれならはとひつゝつるまもやまれん

○夕玉集
八橋のくもでにかへるまにむかふや物は海の関となりつゝ

○雲玉和歌集
さかすの花さきわたる あるしく八はしと八橋わたりてくさはみだれ

○うたゝね 阿仏尼まとはし下向記 三河の国八橋といふ所を見れハ是も昔
にハあらすなりぬるにや 橋も只一つぞ見ゆる かきつはた多かる
とばかりにもなけれの名残も時雨なる比なれは 見るかひなきかと見ゆる
草もなし 業平の朝臣の有けるまゝしきめると なにはとなく哀也
られて法中しは過きしや されのまらんとすこし をとゝしみね
○いさよひの記 阿仏尼鎌倉へ下向の記 八橋にとゝまらんと闇かと ふらゝ さそ橋そ
之すなるぬ
さゝかにの蜘手あやうき八橋を夕暮かけて渡りぬる哉

参河八橋

俊頼口伝集

山菅の橋　　如是ヶ淵のあたり　　下野国日光

○道興准后廻国記上 日光山にまうでてまかる又昔ハ二荒山と申となん此
寺山菅の橋とて深秘の子細ある橋侍り人をわたさず侍り
○又我身にもわたらで侍りつきてによめる
法のみちかゝるためしやわたらまし山菅の橋

○来去庵宗祇記行このあたりより日光山へおもむき寺過ぎ加居と申宗
なとこた此の名より名ある橋を渡れ出る菴谷ある寺紀
より橋をはや書也もはたれ人中をとわたしゝて橋も
名は此のこの山菅の橋と昔より此ゝはたるとある此の山ニ
小菅生すと万葉集にも見ゆ名と見えたり

○唐の物語紀

○活所遺稿 巻一 東山道紀行廿四首中 二荒山橋 本名山菅橋
山菅橋下水、今自作金湯 天遣無情物 隨時輒昂藏

摂河掛橋　やまのかけはし　近江国摂河郡

川は京浦の口浜あてまはる同所之

○古様集　○夫木抄廿一

若きく摂津のかけ橋かけての跡さへしるひとよ

真間継橋　ままのつぎはし　下総国葛飾郡

今真間の弘法寺の門前に真間の継橋とて四五間はかりなる

小橋あり　そのかたはらに　手児女の明神とて社にいはひし

小社あり　真間の井もあり　右之説（まゝ）古文の沙石にも載れり

古跡の事也　承るに小田原家と戦ありし比之上の山に

なの小城の跡の跡あると　今里見之馬場跡といふ

山なる真間の川は新利根川とて　おかし小浜の跡あり

まか治といふる地也　今按に江戸川と云利根川より分

流の末より江戸の中を経る所の注にふれたれはかく

いふ之

○今按集といふ人のよしいはる不

かしかの人のいふれはあまく葛飾のまゝの継橋　抄也詠人

○鴨長明集

かつしかや河をひ卯木咲間よりあらはれよかけはまゝの継橋

まゝのつぎはし　　まゝ継橋

○拾玉集一　夜
さゝく河ままのつぎはしうちわたれは人もかよひぢたえにけれのこる

丸橋　　まろはし　獨木橋　獨梁　榷 音角　彴 音灼

○後拾遺十四　恋四　　相模
はやうしと思ひしことはたえの丸橋のまろきなるをもかくすこそのおちなん

○淮南子十繆称訓　若行獨梁不為無人不兢其容　○注獨梁一木水橋也行其上常兢々恐陥也

○廣志　獨木之橋曰榷 音角 亦名獨彴 音灼　榷水上横一本為渡彴今謂

丸木橋　まろきはし——

○金槐集上　夏

鵲の羽にあらぬ雲の丸木橋ふみみぬまにきこえやつらん

○沙石集三ノ下　信州の中若き武人京より人を具して下りけるに

行中人なりにまさりけるにたより文をおこせけるあまたありけるを隠し

置きたりけるを知りて見ることとおもひけるに是を取り出して

家内にまぎれさせ給ひけるをまたに子息の兄弟の山寺へ遊けると

聞て母のおそれをさまさせんと母ことうしなひて所知分けにさし給ひ伴人

此親ありあまりてよの中の文のやうなるを書しけるにはりたる文を

持てくれは人の紹介なりと思ひてやしなひ母含子嫌ひし云

ていらせけり皆類似のたよりして給ひける

信濃なる木曽路にかゝる丸木橋ふみ見し時はあやふかりし我

この返事する

[illegible]

○夫木抄　廿一

難波江やいくそのにかけて丸木橋ふみこそとはめ人はおもはん　法性寺関白

○同　廿五　家集

志賀の浦のたまさかにのりてあらまろきはしふみよけてわたらまうき

志賀徒積　まゆのつぎぐし

志賀　浦　池　黄　京　濱　済　　梅津忠

○夫木抄廿一　次段六帖　　堀河院御製

多かりし月をながめて志賀の浦に浮ぶ日よりも済の　徒積

同

志賀の浦の小舟の三をもちて波のまにまに見てし済の徒積し　宇治大納言

○堀河百首

蛙なく志賀の池へを尋来て帰る山路の花ぞしたへり　仲實

同

吹あらし夜もしぬらん君ためしみる志賀の徒積に月やのこれる　孝時

同

はつとしのとらのかげまで数ふかくそ(?)なかなく待つかに徒積　基俊

○萩本集

かよひこし志賀の徒積をたえてくは絶ぬつきよをいかにせん

松浦橋　まつらはしの名—

松嶋なる橋也　信実

○名寄六　良玉集　民部卿忠教

聞わたるつゝみにやまき比良の夜渡りける松浦の橋—

布留ノ高橋　ふるのたかはし—　大和　山辺郡

、金槐集中名不知

いそのかみ布留の高橋ふりぬとももとつ人にはこひやわたらん

○夫木抄八　五月雨　家集　二条院讃岐

いそのかみ布留の高橋たかしとも見えすなりけりさみたれの比

同廿一　よみ人しらず

まちわひる妹も知ぬ人かよへはふみとゝろを布留の高橋

○万葉集七十二

石上布留の高橋たかゝしに妹かまつらん夜そ更にけ

五條橋

今ハ三条四條は京中の二橋にて五条ハ絶たり昔ハ五條も橋ありしとみえ淑望道念詩集にも見え まことに猿楽の熊野の詞物にも四条五条の橋の上と いへり猿源氏といふ双紙にも又西東屋宿の蓋猪 鰯うり出されたり

○浩所遺藁 四　九月十四日五條橋

月落星殘出五條　川原秋色時寥寥　今朝一歩南州路　回憶成都萬里橋

○艸山集 十九　晩自洛帰

暮望雲山出市朝　肩輿落落路迢迢　利奔名走不關我　条月飛過第五橋

氷橋　こほりのはし　信濃国諏訪

○信濃国諏訪郡の湖水にこほれる時まことにはしのことく往来の人あるのうへをわたる之

○鴨長明哥　氷

さえそのとにくあまちの郡やかよふらんすはのおの橋は氷はる

御廟橋　こへうのはし　紀伊国高野山

○儼塾集ニ過御廟橋　俗誤称無明橋渡者往々危懼焉

御廟橋前旬作疑勸懲善悪最霊奇意氣揚々歩有罪思慮慓々危眼惑看魚魚変（鮮）心迷臨桟桟成縁嗚呼昧者何如是五欲塵労自所欺

○今案御廟こへうと無明むめうと名の似て訛失之比歟

御廟之橋　こへうのはし　俗云無明之橋

○宗祇諸国物語ニ　紀州高野山ハ都率の内院を表し大師入定の廟前なる（面）玉川に御廟の橋ハ二間ハかりとかくて細川さしくと流るを悪業深き者ハ之渡りて堕落すとやいふこる六十町ハかり玉川の水を出る細流これの尊きことも大師の御誦ともこれてハ似やたつる人孫人のこつみの罪の玉川の水

浅水橋
○催馬楽

はさんつのはし　越前　一云大和　山城説淳

○夫木抄

○夫木抄　光未考

ことゝてん人の心もはやうきにふみこゝろみよ　足ぬ浅水のはし　前中納言定家臣

浅水の橋ハ思ひてつれとも　取てはなるそしひしき　詠人不知

又一人も仲やぬりく人あり承名さへ　あさうつのはし　光俊朝臣

○奥細道芭蕉記行　浅白根か嶽かくれて比那か山高くはらまる　はさんつの橋をわたりて玉江の芦ハ不に出けり　鶯の関をこえて湯尾の峠を越れハ燧か城帰山に初雁を

十四日の夕敦賀の津に宿をもとむ

○安義橋　あきのはし

○今昔物語十三　近江国

○安義橋　今昔十三　近江国——の思のゝと
蒲生郡ニ安吉ト云フ所ノ橋也

阿波橋　あはのはし

○艸山集十六　阿波橋見残雪　灞橋残雪時一段與詩思
冬景未曾羨夏雲何足奇高山皆露首始射半藏
肥高漂且須愛任他花較遅

芦間橋

いつまでも芦の間に在橋といふ　あしまのむし—　此名不

○史木抄

左様の沢鴫つゞひけるや　春ハ芦間の橋にて見ぬ人

同

まつて[illegible]おしぬれハ芦間なる橋と為称て鴫つゞひけり

佐野の舟橋　さのゝふなはし—

上野国雄氷郡にあり　天下[illegible]国にも名所なりいつも詳なり　上野国

されとも上野国をとまりしとせん所これハおはなる[illegible]舟橋

をも[illegible]つらぬ下野ハ大ほなれハいふなり—

○東海[illegible]鹿宗祇記に　[illegible]も両ふしやまきしして　佐野へ[illegible]付ぬここ

[illegible]の明日鈴舟橋を見るとてこれより出運してまはり大和—

まとに舟橋かけ渡し見えて[illegible]くの山など[illegible]の

[illegible]の[illegible]の名なる[illegible]をいふみ中絶るに[illegible]にまたおき

之[illegible]なふ人と一[illegible]つのはせめる

面影ハ[illegible]昔の名もきてつなきて　佐野の船橋

むかしのなるか目ののやうなれハなるへし—

○清少納言記　橋ハさのゝふなはし—

○詞華集　隆之　雅兼

夕霧に佐野の舟橋音すなり手馴の駒のかへりくるかに　右大弁俊雅母

○名寄

佐野第合　一宗村

○建保百首

もとさえや波のよそにまさるらん佐野の舟橋絶えしとも　家隆　誰ゆへとまし

今按するに此歌とあはせ合せて佐野ハ上野にハあらで紀伊国にありとおほつかなし　かつ此ハ佐野の渡

又舟橋のうへにのゆしきそ

○六帖

東路のさのの舟橋かけめよも思ひ渡りいとひはてなむ

○夫木抄　廿一

いとひする佐野の中なる茶葉之をけ　祐挙

和歌意ハ舟橋の里

三条橋　山城国

○義憲記　貞治下　弐年の夏聖護院の御門跡恵乃流和尚法加持

まて百日三井寺にありしに京都ハ御禁裏にて御筆にいさ

や寺へ参り人まいらせられハ桃花せさせんとて丸をなん

まいらせられしにハ三条の橋もあらわれハ鴨川を渡り大学

寺の御門跡来まし給ハ上の人志賀の山路をへて後に

寺にまいりぬ

猿橋　さるはし　　甲斐

○南郭文集　初編巻四

峡中帰

白猿橋畔白猿啼劍閣懸崖雲欲低隔水樵家皆倚
石極天鳥道獨臨溪公孫躍馬雄圖古張載題銘客
跡迷雙淚非関巫峡恨心中萬事自悽ゝ

さゝやきのはし　　紀伊国

○夫木抄

懐中抄

熊野なる音無川に渡さはやさゝやきの橋しのひ〳〵に

木曽桟

○夫木抄八　きそのかけはし　信濃

百首御歌　時鳥　権大納言実家

ほとゝきす信濃之坂のをちこちに鳴ゑくま駒の口こし之奴木曽の懸橋

○信州採薬記　信濃国岩屋井村の先に木曽の懸橋あり長七十五間欄干あり八百年余前　石垣十四間　元禄あ之戊子年三月に作りたてり此之付ありこにあり

吉蘇路橋　きそぢのはし

木曽路ハ信濃信濃の南のはてにて　信濃国　美濃ハことの事昔より
なりけるを三代実録に美濃に属へきよしの定めに
見えたり今世ハ信濃国とすこの事道新木曽路条下
に具出参考すへし

○清少納言記橋ハきそぢのはし

きだはし　城 文選

石階の上り場に階級あるを俗にきだはしと云ひ又ハ
木橋なともいへり城ハ支太と訓す文選の訓に志有
にせりとよめるも支太ハ山科あたりの志那にて信濃の方
も同事にて坂の多けれハいふ之支多志那ともいへるものか
見えたりけむ

○文選 第二 西京賦 張平子 右平左城 青項丹墀 ○注薛綜曰城
限也謂階齒也天子殿高九尺階九齒各有九級其側階各中
分左右左有齒右則滂沲平之令輦車得上○石向曰城階級也

清水橋　きよミ川ともし

○明月記　承元二年六月廿九日午終上皇臨幸密議（如側）次第云時
事甚不委見及了歟散洪水暑卑渡清水橋入叡陵云
両条御所

○今案清水橋ハ今の五条の橋なり　是清水のたよれハ之
湯谷の謡ニも四条五条の橋のうへといへり

祇園橋　きおんのはし　山城国

○明月記　嘉禄二年六月十日　洪水白日自祇園橋至之云々

乱橋　みだれはし　相模国　鎌倉

○沙石集　二上　尾張国山田郡に右馬允明長と云侍ありけり承久の乱の時京方にて式瀬河の戦に底あまさかゝりて既にとめさして打棄て武士とも京へ走せ上りぬここ鎌倉へ下して義時の人々に会ひて首を斬すへしと湯井浜へ引きけり又例の僧も来て居る歎き死すへきことよと申せし今ハ最後と思ひて一心に念仏しけり
さて乱橋といふ橋のたもとに年来者の知音ありて家ゐ居るにとて下ろさむとひくて物語せり

○今案ずるに

乱橋　三みだれはし
右橋ハ須磨ニ同名の有る　是ハ伊勢玉生浦のはし　伊勢玉
みだれ橋なり　生桂原ハ生浦と同所也
○夫木抄
荻葉わたる野の原北にこそ乱れ橋秋の色にたえてこそあれ

○拾玉集三　當座百首　禁中
九重ににほふミもし乃橋こそ君の政に猶まさるらん

三津河橋

三津河よ一の川　橋之　三津ハ橋本ニ雖有まて　三河のかも川　近江国滋賀郡

○六百番歌合　信定

[illegible]ゆふかけて恋こそわたれ三津川の橋

三級階

○明月記寛喜三年二月十四日、晩登南面縁端如形作欄檻、中央高作三級階、暢廣雖不可然之庭花並山月之賞之、須又不堪行歩老身可昇降也、人定嘲哉

柴橋　志もまー

○亀山殿七百首　山家橋

苔道のまゝつゝきし袖ぬれ　山里乃ほやうき柴の名の柴木ー

冨小路前中納言

○夫木抄六春　御集三巻御本　山家夕霞　後鳥羽院

霞立る名の柴橋かくれて思への霞をわたるやとさまー

七條橋　山城志

むかしハ京鴨川乃二条三条四条五条まてに橋ありしと見えて猿楽の謡物の熊野にも四条五条の橋の上と云
又太平記にハ七条の橋も見えてさり只今ハ昔皇都の経緯を
以ハ八条を一条より九条に至るまてに橋ハあるか如し

○太平記ハ　平経九条合戦にて備後三郎高徳哭之事に似し
清方のつれなきつひに見えず兵乱欲勢に寄りてよやにて大人まて人
と候作へバ高徳ハ七条の橋つめに陣をとりて居候ひし

引橋　ひきはし

今いふ引橋子なり　うちはしといふハ今浮橋まていひてハ
さし引橋にまとていふ之俗に今ひきはしと云之

○義経記ニ吉野忠信合戦の事に今晩より首をとりて鎌倉殿の見参
に入れよやとて力をぬき太刀のつかにさしつゝぬくやうにして力を
八幡にまいりて内へとをりて堀をこえ内庭のひき橋とりて天井にのぼり
てゐたりけれハ云之

平橋　ひらはし

これハ夜のあきらかなるをいふ之

○白氏文集廿五　宴散律　小宴追涼散平橋歩月同

一橋　ひとつはし

○六帖

津の国の難波の浦のひとつ橋君をみし心ハわたりそめせし

○夫木抄廿一

橋のこる狭田乃入江のひとつはし心不安くもすそぬらしける

樋爪橋　ひつめはし

○明月記　承元二年十月十五日　巡至四宮衛門八幡御山過
桜井其山崎宿不將休息衛及食黒於桂樋爪橋辺乗車
左中弁騎馬連下知於白羽南門月出ここ

櫃河橋　ひつかはのはし

○良玉集
なふれりて踏そてふるまれは明てこにこそひつ河の橋

○夫木抄
日くれなは其の屋にこそ伏見なれ明てゆくゝ人ひつ川の橋

国立公文書館
National Archives of Japan

紅葉の橋
このはしハ名所にあらねハ故事の部に出せり
○拾玉集巻一秋
たなはたのもみちの渡ハ増りなん　紅葉橋にやまさるらん

反橋　もとりはし
○神社考
林道春
山城名
詳節　反橋
浄蔵者三善清行キヨユキカ子也ナリ清行死蔵於一條橋祈之
清行蘇生世人反曰号橋
安倍晴明役使十二神将妾畏神形因咒以置十
二神于此橋下有事時喚而使之自是世人占吉
凶于橋邊則神必託人以告云

一條戻橋

○万物故事要決六 一条堀川の橋をもどり橋と云ハ何成そ浄蔵
貴所の父を祈りかへしてより此名ありとそ 下略 式部熊野之詣ありし
男子八人相具して夢ありて途中にて知之聖帰りて四日如来界乳
に相まして男子此橋に於て過ちて即ちかゝりたるに忽ち蘇生し
侍ぞ成りて道に死する之君相共蘇生ス故にかへり橋といひけ
るを今ハもとり橋と申之是の末詞先ぞ源氏宇治巻子古人ハかへるの
橋なりといふ此橋の子之宇治橋といふハ辟之と所信なハ死
られより逝と云死の字をかへ之論語云逝往往者如川流かと云こ人の
逝去せるを川の流の返らさるに喩ふ之

勢多橋　せたのはし

瀬田の長橋とも云ふ同所之前ハ下ニ別にせた
○武内宿祢の前にて行ふ之みせきの口なとあるは即ち
此前之
○東海道集二 方ニてかりられハとまりて湯多勢多の橋の下地にあ
まことで
疑人ます水とそて有るかな人せきのそ一本いまそと往ゆく
○夫木抄廿二
栗本や勢多の橋けくたつとむかし運ひつくるこうき物代
○平西家集

粟津野の西まて御たくハ勢多の橋こひて渡れと云々　下

○新撰髄脳
望月の駒引わたす音すなり勢多の中なる橋もとゝろに

○夫木抄　卅二
栗本や勢多のおかけにたてむ君か運ひ渡す浮き橋　為家

○和泉式部集
いかなる事にか　勢多の橋のもとにて詠ける
浦のうらいさり小舟のよそへつるいをそ忘れぬハ之有けり

勢多長橋　近江国栗本郡
瀬田の橋と同し其所にありと云

○千載集　大嘗會哥
みつき物絶すそなふる東路の勢多の長橋音もとゝろに

○夫木抄　廿一　為家
打つゝく瀬田の長橋跡もなし一村見ゆる野路の松原

○堀河院後度百首　神祇伯顕仲
旅人やまたき渡るゝ暮ならて勢多の長橋引渡すなり

○歌枕名寄
ゆく月の鏡の山や更ぬらん人まつこゝろ勢多の長橋

○太平記四　笠置囚人死罪流刑之事　源中納言具行卿ハ佐々木佐渡判官入道道誉路次を警固して鎌倉へ下

○古字記

まちなみてうしなはるゝ一きよりかゝりて岩中人やうき人楊四の
梯をのこるとぞ
はふのことなふ糸多の夢の世をいふものゝ一つは物多の也し（に新葉）
要す此家参考太平記也に出して皆の世を新葉集（かつ邪 新葉 イ）
小めの世にと延文今川家典利家金禄記承源記南
綿本営にはいふも出しと云新葉集にはつゝし上之
之より

姿橋　よかくのなし

勝間田池ハ大和国添下郡にて立つきより勝間田池の東　大和国添下郡之

○名寄

広田社歌合　源頼政

かつまたのますミの橋のいたまよりうき名ハ猶や世にとまらん

をときれ—

出羽陸奥の方言に小川などに昔橋の丸木を二本かけてその上に柴木を並べたるかり橋をさきしといふ也

橋爪　はしつめ

今おもふに橋爪は橋の両方の出口をいふ也類堂つ未は君にかよひていへり軒の端末はつめといふに同し傘にも爪打ありと人の爪によりていふ也その才は（字書記爪の訳なり）何も此出し

○明月記文暦二年閏六月廿二日兵部卿書信孫散不審之椰部興入御坐于宿院仍大夫史季継来向之宮部人出行向之宮橋東爪云々

橋桁　はしけた

○堀河院太郎百首　　橋　　藤原俊頼

朽はつる板田のはしあれはけてさゝ綱にてわたりきにけり

○夫木抄廿二

栗本や勢多の橋けたたてむまて運ひつくるうきいかた

橋脚　はしはしら

○白氏文集廿六律和微之春日投簡陽明洞天五十韻詩○船頭龍大(天)矯橋脚獸睢肝

橋下　はしもと

○新居名所

高師山松原又西鶴のはしかとみて月渡る又雨　基家

三和大橋

京都の近江にて大橋といふもの三所をいふ由をしらす

○拾芥抄五大杉[橋]卿　男頭石　山大　近二　宇三

山崎　今大渡九　近江　勢多　宇治

橋占　家林拾葉　六

はしたつ　梯立

はしハ今俗にはしごといふ笞梯子なんはしごといふのあれ
ぞ古へハの句りはしともいへりそれをおし立て上への句んに
料にするを云又云穂の譜を叙ずることの句おほかりけれハ
はしをとろともいへり

○伊勢集
恋すきく　天の橋立はしたてておよばぬ恋も　するかな

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan